

生誕 260 年記念企画 特別展「北斎づくし」

東京ミッドタウン・ホール（港区・赤坂）

2021.07.22～09.17



「葛飾北斎」(1760～1849)は、森羅万象を描き抜こうと挑戦を続けた画狂の絵師で、今回生誕260年を記念して膨大な北斎作品で会場を埋め尽くす特別展「北斎づくし」である。展示内容は北斎漫画のコレクターである「浦上満」氏の全面協力により、「北斎漫画(初期～15編)」全883頁、「富嶽三十六景」全46点、「富嶽百景」(初期～3編)全102図と豪華な内容である。

『北斎漫画』は、江戸の風俗、職人の作業の様子、動植物、風景、建築、人物、故事から妖怪に至るまで、約3600図が描かれた「全15編の絵手本」で、本展では、所蔵品から厳選された「約500冊、全883頁」が展示品の入れ替えなしで公開されている。

画伯にとって富士山は終生の画題であり続けたが、70歳代で富士に挑んだ《富嶽三十六景》全46点、《富嶽百景》全102図が一堂に会する空間に加え、高精細デジタルデータを活用した映像展示も実施され、あらゆる事象に好奇心を抱き全てを描き尽くそうとした画伯の世界を全身で体感できる催事である。



葛飾北斎《神奈川沖浪裏》(1831～33)年

多色刷木版画は、力強く荒れる大浪の先端が、爪を立てて浪に漂う舟を襲い大浪に食われそうな構図で、人物の頭がドクロのように白点に見える作品は、俗に「浪富士」と呼ばれている。



葛飾北斎《凱風快晴》(がいふうかいせい)

藍色のぼかし摺で青い空を背景にし赤々と燃焼しているかのように染められた富士山頂には雪が残る。山容を赤く染める富士に一面いわし雲を描くのみで簡潔な構成で、雄大な自然の景観を構成させる作品で、通称「赤富士」と呼ばれている。



葛飾北斎《山下白雨》(さんかはくう)

画面に山裾の広がりや山の高さを巧みにあらわし、毅然として聳え立つ姿の富士に大きな稲妻が走る様が見事に描かれている作品で「黒富士」と呼ばれる1831(天保2)年作の絵巻物である。